

青年期女子の痩身願望のゆらぎに関する研究

仮屋園 昭彦*

(2002年10月7日 受理)

Fluctuation of Drive for Slimness in Adolescent Women

KARIYAZONO Akihiko

Fluctuation of drive for slimness was investigated in the present study. Although the strength of drive for slimness is not static and constant but is variable, depending on the situation, little is known about this fluctuation. The purpose of the present study is to analyze the effects of psychological factors on fluctuation of drive for slimness. In the present study, in order to examine fluctuation, two kinds of concrete situation in which drive for slimness might be high in one situation, and be low in the other were presented. Discrepancy between the two drive for slimness scores was interpreted as fluctuation score. As psychological factors, the effects of narcissistic personality, approval motivation, and sensitivity of social desirability on fluctuation were investigated. The results showed that self-insistence (narcissistic personality) and social skill (approval motivation) had effects on fluctuation, and that the low fluctuation and high drive for slimness group had high approval motivation. There is room for further investigation into the fluctuation of drive for slimness. The first question to be discussed is the significance of fluctuation. Large fluctuation admits of two incompatible interpretations, one is a low drive for thinness and the other is a high drive. The problem of significance of fluctuation remains to be solved.

問 題

人間がもつ特定の心理特性の強弱は、当然のことながら、一人の人間のなかで常に同一レベルに保たれているわけではない。何らかの心理特性が、ある状況では強くなり、別の状況では弱くなる。

*鹿児島大学教育学部心理学科

Department of psychology, Faculty of education, Kagoshima university

あるいは、特定のテーマについての考え方が、状況、環境、立場が違えば一人の人間のなかでも様々に変化する。つまり、人間の気持ちや心理特性は揺れ動くのである。そして、こうした心の特徴を状況依存性と呼ぶ。人の心は状況依存性が高く、状況や環境、周囲との関係を越えた一貫性をもっているとは言い難い。

特に痩身願望は、一人の人間の心のなかで変化しやすい、状況依存性が高い心理特性だと言える。場面や状況、立場が変わると、痩身願望の強弱は一人の人間のなかで大きく変化するのではないだろうか。たとえば、青年期の女子であれば、恋人とともにすごしているときと同性の友人と楽しく食事をとっているときとでは、痩身願望の強さは異なるのではないだろうか。つまり前者では強くなり、後者では弱くなる。

痩身願望はこのように状況依存性が高く、ゆらぐことが多い心理特性である。しかし、それにもかかわらず、従来の痩身願望研究では、痩身願望がもつゆらぎが取り上げられることはなかった。痩身願望の強さが質問紙法で測定される場合は、特に状況や場面が設定されることではなく、質問項目だけが並べられる、という方法がとられていた。これは被験者の一般的な痩身願望の強さを捉えているだけである。しかし、痩身願望がゆらぎの多い心理特性である以上、一般的な痩身願望の強さという概念にどのような意味があるのだろうか。むしろ場面や状況間でのゆらぎこそ痩身願望の特性を正確に反映した視点なのではなかろうか。

なぜなら、痩身願望の場合、ゆらぎはその強固性を反映しているからである。つまり、痩身願望のゆらぎ幅が大きいということは、状況によっては痩身願望が弱くなり、その強固性が低いことを意味する。したがって、ゆらぎ幅が大きい人は、痩せるということが当人にとってはそれほど切実な問題にはなっていないと解釈できるのではなかろうか。そして、痩身願望が高い水準で保たれ、しかもそのゆらぎ幅が小さい人こそ、痩身願望の強固性が高く、痩せるということが当人にとって切実な意味をもっていると言うことができる。したがって、痩身願望の強さという場合の強さとは正確に言うと強固さであり、痩せることが当人にとってもっている切実さの程度であると言える。この意味でゆらぎこそ痩身願望に内包されている切実さを捉える指標になりうると思われる。

このように、ゆらぎという現象は、強固性、切実さという、痩身願望の根底に横たわる問題を浮き彫りにする指標になりうる。そこで本研究では、ゆらぎの問題へ切り込んでいく第1歩として、ゆらぎ幅を規定する要因の探索的同定を目的とする。そしてこの諸要因をもとに、痩せるということが切実なテーマとなりうるような青年期女子のありようを考えてみたい。

以上の目的にもとづき、本研究では、痩身願望のゆらぎ幅を規定する可能性のある要因として以下の3つをとりあげ、これらの要因が痩身願望のゆらぎに与える影響について考えてみたい。

1) 自己愛

自己愛傾向は痩身願望のゆらぎ幅に影響すると考えられる。下坂（1999）は、摂食障害者と自己愛傾向との関連を指摘している。自己愛とはいわば我執、つまり我への執着である（小此木、1992）。摂食障害の背景には自己や自己像への強迫的なこだわりがある。したがって食事や体型を

めぐる症状自体が自己愛的であると言える（下坂，1999）。

摂食障害についてふれたが、痩身願望は摂食障害へ至る要因的経路の一つになりうる。この意味で痩身願望のゆらぎ、強固性を規定する要因として自己愛を取り上げることにする。

2) 承認欲求

承認欲求とは、他者から肯定的評価や社会的強化（例えば承認）を得、否定的評価や社会的罰（例えば批判や拒絶）を避けようとする欲求である（植田・吉森，1990）。周囲から肯定的評価を得たい、認めてもらいたい、という欲求は誰しもがもっている。ただ、特にこうした傾向が強い人は、心のなかに空虚感を抱え、自足の充実感、自己信頼感、自己肯定感が薄いという傾向をもつのではないか。そのため、自己信頼感、自己肯定感に支えられた自分なりの評価、価値判断の基準が自分のなかに育たない。その結果、自分で自分を評価するという自己評価ができなくなってしまう。自分で自分を評価することができないため、周囲からの肯定的な評価、承認ばかりを際限なく求めることになる。

周囲からの肯定的な評価、承認を求める場合、特に女性は、自己がもつどのような面での評価を得ようとするだろうか。向井（1998）は、痩身礼賛という価値観が思春期、青年期にある女子に抑圧的に働いている点を指摘している。また、浅野（1996）は、現代の女性が社会に受け入れられているという実感や充実感をもつためには、「痩せていておしゃれができること」が不可欠な条件になっていることを指摘している。こうした指摘を考慮するならば、青年期の女子の場合、痩せることが周囲からの評価、承認を得ようとする手段の一つになっていることが推察される。

以上の意味で承認欲求の高低は痩身願望の強さ、ゆらぎを規定する要因になりうると判断できる。

3) 社会的望ましさによる態度変容の度合い

社会的望ましさというによる態度変容という概念は、一般的に社会で望ましいとされている価値観や規範にどの程度影響を受けやすいか、を意味する。ここで、痩身への礼賛は、価値観が多様化した現代社会のなかでも依然として多くの人に共有され、望ましいとされている価値観の一つである（仮屋園、1997）。痩身礼賛が現代社会を代表する価値観の一つであるならば、社会的望ましさによる態度変容傾向が強い人は、痩身礼賛という価値を受け入れやすくなることが予想される。こうした意味で社会的望ましさによる態度変容という概念は、痩身願望のゆらぎを規定する重要な要因になりうるのではなかろうか。

次に、ゆらぎ幅の測定方法について説明しておこう。痩身願望の測定は、先述のように、従来は、痩身への意識を問う質問項目だけを並べるという方法がとられていた。そこで本研究では、場面や状況によるゆらぎという切り口から痩身願望を捉るために、痩身願望の測定にあたって、特定の場面設定を行った。

場面は2種類あり、これをFigure 1とFigure 2に示す。Figure 1は自分一人だけの場面であり、単独場面とする。Figure 2は友人と一緒にいる場面であり、対人場面とする。各場面ごとに具体的な状況を2種類設定した。2種類の状況は、それぞれ痩身願望が強くなる状況と弱くなる状況で

単独場面**痩身願望強状況**

一人でお店に入ったところ、気に入った洋服が見つかりました。サイズをみると①「これなら着ることができそうだ」と思いました。ところが試着してみると、②サイズが小さかったようで、着ることができませんでした。このとき、あなたはどのように感じますか。

痩身願望弱状況

一人でお店に入ったところ、気に入った洋服が見つかりました。サイズをみると①「これは少しサイズが小さいかもしない」と思いました。ところが試着してみると、②自分にぴったりのサイズで着ることができました。このとき、あなたはどのように感じますか。

Figure 1 単独場面（痩身場面強状況と痩身場面弱状況）

対人場面**痩身願望強状況**

仲のよい友人（同性）と食事をすることになりました。その友人は自分と同じくらいの体型をしています。友人はダイエットのため、食べる量を意図的に減らしており、少ししか食べません。このとき、あなたはどのように感じますか。

痩身願望弱状況

仲のよい友人（同性）と食事をすることになりました。その友人は自分と同じくらいの体型をしています。友人は食べる量など気にせず、たくさん食べています。このとき、あなたはどのように感じますか。

Figure 2 対人場面（痩身場面強状況と痩身場面弱状況）

1. 体重が増えるのが怖い
2. もっと痩せたいという思いで頭がいっぱいだ
3. 体重にとらわれている
4. 何が何でも体重を減らしたい
5. もっと痩せていたらと悔やむことが多い
6. 体力が落ちてもとにかく痩せたい
7. 少しでもはやく痩せたい
8. 痩せられると聞けば何でもする
9. 自分が痩せることを考えるとわくわくする
10. 体重を量ったときに減っているとうれしい
11. 今、痩せることに一番興味がある

Figure 3 痩身願望測定尺度

あり、前者を瘦身願望強状況、後者を瘦身願望弱状況とした。

まず Figure 1 の単独場面を説明しよう。単独場面は自己イメージと実際の自己のあり方との比較場面である。そしてこの両者のずれの方向に基づいて瘦身願望強弱の状況設定を行った。Figure 1 は洋服店で試着をしている場面である。Figure 1 の 2 つの状況は、下線①に自己イメージ（「これなら着れそうだ」、「これは少しサイズが小さいかも知れない」）、下線②に実際の自己のあり方（サイズが小さかったようで着ることができなかった、自分にぴったりのサイズで着ることができた）が示されている。そしてこの自己イメージと実際の自己のあり方とのずれの方向によって瘦身願望の強さが変わるように操作した。つまり、瘦身願望強状況では、マイナスの方向にずれがある場合で、自分が予想以上に肥っていることを思い知らされるような事態、瘦身願望弱状況では、プラスの方向にずれがある場合で、自分が予想以上に痩せていることがわかるような事態、を設定した。

次に Figure 2 の対人場面を説明しよう。対人場面は体型が自分と類似した他者と実際の自己のあり方との比較場面である。そして、自分と体型的に類似した他者の行動を観察することで瘦身願望の強さが変わるように設定した。Figure 2 の 2 つの状況は、下線部に自分と同じ体型をしている友人がとった行動が示されている。そして友人がとったそれぞれの行動によって瘦身願望の強さが変わるように操作した。

このように、単独場面、対人場面、それぞれのなかで瘦身願望強状況と瘦身願望弱状況とを設定し、両方の状況で被験者の瘦身願望の強さを測定する。そして、瘦身願望強状況と瘦身願望弱状況との間の瘦身願望の強さの差を瘦身願望のゆらぎ幅とみなし、ゆらぎ得点とした。

ゆらぎ幅をみるために、単独場面と対人場面の 2 種類の場面設定を行った必然性についてふれておこう。通常、我々の心理状態がゆらぐ場合というのは、普段より強く自分というものが意識されるときである。普段より強く自分が意識される典型的な場面は比較をしているときであろう。そこで本研究では自己にかかわる比較として考えられる 2 種類の比較パターンを設定した。1 つが自己イメージと実際の自己との比較であり、もう 1 つが他者と実際の自己との比較である。

方 法

被験者：大学、短期大学、専門学校の女子学生 135 名を対象とした。平均年齢は 19.15 歳であった。

手続き：データの収集は質問紙法で行った。

調査内容：調査内容は以下のとおりであった。

1) 瘦身願望：瘦身願望の強さは馬場・菅原（2000）によって開発された瘦身願望測定尺度 11 項目を用いた。この尺度はあくまで痩せたいという意識の強さのみを測定するのである。この尺度項目を Figure 3 に示す。Table 1, Table 2 での各瘦身願望のゆらぎ得点はこの尺度を用いて算出した。

2) 自己愛：自己愛を測定する尺度として小塩（1998, 1997）が用いた NPI（自己愛人格目録：Narcissistic Personality Inventory）37 項目を用いた。NPI の項目を Figure 4 に示す。

優越感・有能感

1. 自分自身では要領もいいし賢明さも備えていると、私は思っている
2. 周りの人々はたいてい私の権威を認めてくれる
3. 私は才能に恵まれた人間であると思う
4. 私は他人より有能な人間であると思う
5. 周りの人たちが自分のことをよい人間だと言ってくれると、自分で
もそうなんだと思う
6. 私が言えば、どんなことでもみんな信用してくれる
7. 私はまわりの人が学ぶだけの値打ちのある長所をいくつかもっている
8. 私は生まれつき、リーダーとしての素質をもっている
9. 私は周りの人たちより、ずばぬけたものをもっていると思う
10. 自分の思うとおりに人を使うのは、それほど難しいことだと思わない
11. 私はよいリーダーになれる自信がある
12. 私に接する人はみんな、私という人間を自然に気に入ってくれるようだ
13. 私はもともとリーダーになるのが性格にあっている
14. 私は自分の身体を見るのが好きだ
15. 私には自分の身体を人に自慢したいという気持ちがある
16. 周りの人が私の期待しているだけの敬意を払ってくれないと、気持ち
が落ち着かない
17. 人に好かれるのは、私自身にどこか魅力的なところがあるからだと思う
18. 私は美しいものを決して見逃さない優れた感性の持ち主だ
19. もし、この私が世界を自由にできることができるならば、もう少し
世の中にできると思う
20. 人は誰でも私の話を喜んで聞きたがる

注目賞賛欲求

21. 私には、注目の的になってみたいという気持ちがある
22. どちらかといえば、私は注目される人間になりたい
23. 私は偉い人間だと言われる人間になりたい
24. 私は支配欲が強い方だと思う
25. 私は人からほめられることを望んでいる
26. 私は人々を従わせられるような権威をもちたいと思う
27. 私は強い人間だと思われたい
28. ここというときには、私は人目につくことをすすんでやってみたい

自己主張性

29. どうやら私は、控えめな人間ということにはほど遠い人間だと思う
30. 私は自分の意見をはっきり言う方だ
31. 私はどんなことでも、あまり気兼ねなどしないで自分の好きなよう
に振る舞っている
32. 私は自分で責任をもって決断をするということが好きである
33. どんなことでも、敢えて挑戦するというようなやり方が私の性格に
あっている
34. これまで私は自分の思い通りのやり方でやってきたし、今後もそ
うしたいと思う
35. 自分自身の気持ちに忠実に生きるということがまず重要である
36. いつも私は話しているうちに、話の中心になってしまふ
37. 私は、周りの人に影響を与えるような才能をもっている

Figure 4 自己愛人格目録 (NPI)

<u>外的統制因子</u>
1. 私は、人を喜ばせるために、自分の意見や行動を変える
2. 私は、人とうまくやつたり好かれるために、人が望むように振る舞おうとする傾向がある
3. 私は、励ましがなければ自分の仕事を続けることが困難である
4. 私は、自分の考えがグループの考え方と異なるとき、自分の考えを言いにくい
5. 私は、友人が自分を支持してくれることがわかっているときだけ、すんで議論に加わる
6.*私は、人からよく思われるために自分を変えようとは思わない
7. 私は、自分が進む道を必ずしも自分で決めていないと思うことがある
<u>社会的スキル</u>
8. 私は、パーティのような社交の場では、他人のいやがることをしたり、言ったりしないように注意している
9.*私は、自分の行動を弁解したり、謝罪する必要があると感じることはめったにない
10.*私にとって、人との様々な交流のなかで“上手に”ふるまうことは重要でない
11.*私はたいてい人が反対しても自分の立場を変えない
<u>冷めた人間関係</u>
12. 重要人物に取り入るのは賢明である
13. どれほどよい人間かで、友人の数が決まる
14. 最もうまい人の扱い方は、相手の考えに同意したり、相手の喜ぶようなことを言うことである
<u>慎重さ</u>
15. たとえ自分が正しいとわかっていても、他人からみれば間違っていると思われるようなことは、他人の前ですべきではない
16. 人と接するときは、積極的であるより控えめな方がよい
17. 私は、同じ状況であっても、相手が違えば異なる行動をとる
<u>対人的防衛</u>
18. 誰かが私のことをあまり良く思っていないことがわかったら、次にその人にあったとき、印象をよくするためにできるだけのことをする
19.*私に対してどんな批判があろうと、私はそれを受け入れることができる

Figure 5 承認欲求尺度 (MLAM) *は逆転項目

- | |
|--|
| 1.*料金を払わないで映画館に入っても絶対にみつからないことがわかっていていれば、おそらくそうすると思う |
| 2.*彼が正しいことは知っていても、権威のある人に逆らってみたくなることがある |
| 3.*仕事（勉強）をさぼるために仮病を使ったことがある |
| 4. 気にくわない相手に対しても、常に礼儀正しく振る舞う |
| 5. 自分が知らないことについては、知らないとはっきり言う |
| 6. 自分の失敗に対して他の人が責めを負うことは、私には耐えられない |
| 7. 恩を返すように言われて、腹を立てたことはない |
| 8. 自分と異なる考えを誰かが述べても、いらだたしさを感じることはない |
| 9. 誰かを叱りつけたいと思ったことはない |
| 10.*自分に頼み事をしてくる人に、腹立たしさを感じることがときどきある |

Figure 6 社会的の望ましさによる態度変容の度合い (MCSD) *逆転項目

3) 承認欲求：植田・吉森（1990）が作成した MLAM（日本版承認欲求尺度：Martin-Larsen Approval Motivation Scale）を用いた。項目数は、植田・吉森（1990）が因子分析で採用した5因子に基づく19項目であった。MLAMの項目をFigure 5に示す。

4) 社会的望ましさ：Crowne & Marlowe（1960）が開発した MCSD（社会的望ましさ尺度：Marlowe-Crowne Social Desirability Scale：）の日本語版を作成した北村・鈴木（1986）が項目として適當だと判断した10項目を用いた。MCSD尺度の項目をFigure 6に示す。

1) から4)までの調査は「あてはまる」から「あてはまらない」までの5件法であった。「あてはまらない」に1点、「あてはまる」に5点を与えた。

結 果

1. 痩身願望のゆらぎ

最初に、本研究で設定した痩身願望の強弱の2つの状況で痩身願望の強さに差が出るか否かを検討した。この検討のねらいは痩身願望のゆらぎの存在を確認することである。すなわち、ゆらぎが存在すれば、2つの状況間で同一被験者の痩身願望の強さ得点は異なるはずであり、そしてその差がゆらぎ幅（ゆらぎ得点）ということになる。

Figure 1, Figure 2に示した、痩身願望強状況、痩身願望弱状況のそれぞれで痩身願望測定尺度を用い、痩身願望の強さを測定した。そして11項目の平均点を被験者一人あたりの痩身願望得点とした。

Table 1に単独場面での痩身願望強状況、弱状況の全被験者の痩身願望平均得点を示した。検定の結果、強弱状況間で有意な差がみられ ($t = 13.87, p < .01$)、強状況での痩身願望得点の方が高かった。Table 2に、対人場面での痩身願望強状況、弱状況の全被験者の痩身願望平均得点を示した。検定の結果、強弱状況間で有意な差がみられ ($t = 9.33, p < .01$)、強状況での痩身願望得点の方が高かった。

以上のことから、単独場面、対人場面ともに痩身願望強弱の2種類の状況で痩身願望の強さが異なることが明らかになった。これらの結果から痩身願望のゆらぎは存在すると判断した。

2. 自己愛と承認欲求が痩身願望のゆらぎに及ぼす影響

問題の部分で述べた3つの要因がどのようになかたちで、痩身願望のゆらぎに影響を与えているかを分析した。その際、自己愛測定尺度である NPI、および承認欲求測定尺度である MLAM は、全項目の因子構造が明確にされていたため、各因子の因子得点を算出し、この値を独立変数、痩身願望のゆらぎ得点を従属変数として重回帰分析を行った。

Table 1 単独場面での平均痩身願望得点（ ）は SD

痩身願望 強 状況	3.30 (0.88)
痩身願望 弱 状況	2.62 (0.81)

Table 2 対人場面での平均痩身願望得点（ ）は SD

痩身願望 強 状況	3.29 (1.03)
痩身願望 弱 状況	2.79 (0.96)

Table 3 自己愛と単独場面でのゆらぎとの関連についての重回帰分析

目的変量	説明変量（標準偏回帰係数）			重相関係数
痩身願望の ゆらぎ得点 (0.70)	有能感・優越感 (2.32)	注目賞賛欲求 (3.00)	自己主張性 (2.96)	0.25 *
	0.13	0.12	- 0.26 *	

(注1)：（ ）内の数字は平均値を示している

(注2)：* … p < .05

Table 4 承認欲求と単独場面でのゆらぎとの関連についての重回帰分析

目的変量	説明変量（標準偏回帰係数）					重相関係数
痩身願望の ゆらぎ得点 (0.70)	外的統制 (3.12)	社会的 スキル (3.88)	冷めた 人間関係 (2.64)	慎重さ (3.04)	対人的 防衛 (3.04)	0.36 *
	0.14	0.21 *	0.18 *	- 0.02	0.01	

(注1)：（ ）内の数字は平均値を示している

(注2)：* … p < .05

1) 自己愛

① 単独場面

小塩（1998）で見いだされたNPI 3因子（優越感・有能感、注目・賞賛欲求、自己主張性）の各因子得点を独立変数（説明変量）に、痩身願望のゆらぎ得点を従属変数（目的変量）にして重回帰分析を行った。分散分析により重回帰式の有意性を検討した結果、有意な結果がみられた ($F = 2.96$, $df = 3/131$, $p < .05$)。さらに、標準偏回帰係数の有意性を検討したところ、自己主張性の標準偏回帰係数が有意であった ($F = 6.83$, $p < .05$)。この結果をTable 3に示す。この結果では、自己主張性の標準偏回帰係数の値がマイナス値を示している。このことは、自己主張性が低いほど痩身願望のゆらぎ幅が大きいことを示している。

② 対人場面

対人場面でも、単独場面と同様に重回帰分析を行った結果、有意性はみられなかった。

2) 承認欲求

① 単独場面

日本版承認欲求尺度（MLAM）を構成する5因子（外的統制因子、社会的スキル、冷めた人間関係、慎重さ、対人防衛）の各因子得点を独立変数（説明変量）に、痩身願望のゆらぎ得点を従属変数（目的変量）にして重回帰分析を行った。分散分析により重回帰式の有意性を検討した結果、有意な結果がみられた ($F = 3.84$, $df = 5/129$, $p < .01$)。さらに、標準偏回帰係数の有意性を検討したところ、社会的スキル、冷めた人間関係の標準偏回帰係数が有意であった（それぞれ $F = 6.28$, $p < .05$, $F = 3.98$, $p < .05$ ）。この結果をTable 4に示す。これらの結果は、社会的スキル得点、および冷めた人間関係得点が高いほど痩身願望のゆらぎ幅が大きいことを示している。

② 対人場面

対人場面でも、単独場面と同様に重回帰分析を行った結果、有意性はみられなかった。

3. 痩身願望のゆらぎ幅が小さい群の特徴

問題部分で指摘したように、痩身願望を考えるうえで重要なのは、痩身願望が高い水準で保たれ、そのゆらぎ幅が小さい群である。

この点を踏まえ、ここでは痩身願望のゆらぎ幅が小さく、痩身願望が強い人達の特徴分析を目的とする。そのため、痩身願望が高い水準、低い水準のそれぞれでゆらぎ幅が小さい群を抽出した。この抽出手続きは以下の方法をとった。

まず痩身願望のゆらぎ得点が0.2未満の被験者をゆらぎ幅小群とした。次にこのゆらぎ幅小群を対象に、痩身願望強状況と痩身願望弱状況との2つの状況での痩身願望得点の平均を一人の痩身願望得点として算出した。そしてこの痩身願望得点が3より高い群を高い水準とみなし、痩身願望H群、3より低い群を低い水準とみなし、痩身願望L群とした。このようにして、痩身願望が高い水準、低い水準それぞれでゆらぎ幅が小さい群の抽出を行った。

Table 5 ゆらぎ小群と諸特徴との関連（単独場面）（ ）内は SD

		ゆらぎ幅小群	
		瘦身願望 H 群	瘦身願望 L 群
諸 特 徴	自己愛	2.62 (0.55)	2.50 (0.50)
	承認欲求	3.00 (0.53)	2.73 (0.55)
	社会的 望ましさ	3.00 (0.46)	3.14 (0.47)

Table 6 ゆらぎ小群と諸特徴との関連（対人場面）（ ）内は SD

		ゆらぎ幅小群	
		瘦身願望 H 群	瘦身願望 L 群
諸 特 徴	自己愛	2.49 (0.51)	2.68 (0.60)
	承認欲求	3.11 (0.47)	2.85 (0.58)
	社会的 望ましさ	3.03 (0.47)	3.28 (0.65)

Table 7 ゆらぎ小群と自己愛との関連（単独場面）（ ）内は SD

		ゆらぎ幅小群	
		瘦身願望 H 群	瘦身願望 L 群
自 己 愛	有能感・優越感	2.32 (0.65)	2.15 (0.52)
	注目賞賛欲求	2.96 (0.60)	2.69 (0.66)
	自己主張性	2.98 (0.73)	3.08 (0.80)

Table 8 ゆらぎ小群と自己愛との関連（対人場面）（ ）内は SD

		ゆらぎ幅小群	
		瘦身願望 H 群	瘦身願望 L 群
自 己 愛	有能感・優越感	2.16 (0.49)	2.45 (0.61)
	注目賞賛欲求	2.88 (0.82)	3.00 (0.75)
	自己主張性	2.88 (0.67)	3.16 (0.72)

なお、ここではゆらぎ幅が小さい群を対象としているので、ゆらぎ得点に大きなばらつきはない。そこで重回帰分析のような、ゆらぎ幅を規定する要因の同定というかたちでの分析は意味をなさない。したがって、ここでの分析は、要因計画に基づく分散分析を用いたことにした。

1) 自己愛 (NPI), 承認欲求 (MLAM), 社会的望ましさ (MCSD) と痩身願望との関連

上述のように抽出した、ゆらぎ幅が小さい群の、痩身願望 H 群と痩身願望 L 群との間で、自己愛 (NPI), 承認欲求 (MLAM), 社会的望ましさ (MCSD) の各得点の違いを比較した。この分析の目的は、ゆらぎ幅が小さく、痩身願望が高い水準、低い水準にある人達の心理的特徴を明らかにすることであった。

分析は、痩身願望の水準要因 (H 群, L 群の 2 水準), 痩身願望と関連する特徴要因 (自己愛, 承認欲求, 社会的望ましさの 3 水準) の 2 要因分散分析を行った。前者は被験者間要因、後者は被験者内要因であった。

分析の結果、Table 5 に示す単独場面では、分析の結果、痩身願望と関連する特徴要因の主効果がみられた ($F = 5.9, df = 2/52, p < .01$)。多重比較 (ライアンの法) の結果、社会的望ましさ得点が自己愛得点より有意に高いという結果であった。

Table 6 に示す対人場面では、分析の結果、痩身願望と関連する特徴要因の主効果がみられた ($F = 9.48, df = 2/78, p < .001$)。多重比較 (ライアンの法) の結果、社会的望ましさ得点と承認欲求得点がそれぞれ自己愛得点より有意に高いという結果になった。

2) 自己愛 (NPI) の各因子と痩身願望との関連

ここでは、痩身願望の水準要因 (H 群, L 群の 2 水準), 自己愛 (NPI) 要因 (有能感・優越感, 注目賞賛欲求, 自己主張性の 3 水準) の 2 要因分散分析を行った。前者は被験者間要因、後者は被験者内要因であった。

Table 7 に示す単独場面では、分析の結果、自己愛要因の主効果がみられた ($F = 17.45, df = 2/52, p < .001$)。多重比較 (ライアンの法) の結果、自己主張性と注目賞賛欲求がそれぞれ有能感・優越感より有意に高いという結果になった。

Table 8 に示す対人場面でも、分析の結果、自己愛要因の主効果がみられた ($F = 22.47, df = 2/78, p < .001$)。多重比較 (ライアンの法) の結果、自己主張性と注目賞賛欲求がそれぞれ有能感・優越感より有意に高いという結果になった。

3) 承認欲求の各因子と痩身願望との関連

ここでは、痩身願望の水準要因 (H 群, L 群の 2 水準), 承認欲求 (MLAM) 要因 (外的統制因子, 社会的スキル, 冷めた人間関係, 慎重さ, 対人的防衛の 5 水準) の 2 要因分散分析を行った。前者は被験者間要因、後者は被験者内要因であった。

Table 9 に示す単独場面では、承認欲求要因の主効果がみられた ($F = 14.63, df = 4/104, p < .001$)。多重比較 (ライアンの法) の結果、社会的スキルがその他の 4 因子より有意に高く、慎重さが冷めた人間関係より有意に高いという結果になった。

Table 9 ゆらぎ小群と承認欲求との関連（単独場面）（ ）内は SD

		ゆらぎ幅小群	
		痩身願望 H 群	痩身願望 L 群
承 認 欲 求	外的統制	2.98 (0.95)	2.63 (0.92)
	社会的スキル	3.90 (0.63)	3.62 (0.61)
	冷めた人間関係	2.53 (0.76)	2.12 (0.82)
	慎重さ	3.17 (0.42)	2.75 (0.66)
	対人的防衛	2.71 (1.05)	2.59 (0.81)

Table 10 ゆらぎ小群と承認欲求との関連（対人場面）（ ）内は SD

		ゆらぎ幅小群	
		痩身願望 H 群	痩身願望 L 群
承 認 欲 求	外的統制	3.10 (0.72)	2.76 (0.95)
	社会的スキル	3.92 (0.58)	3.72 (0.65)
	冷めた人間関係	2.51 (0.89)	2.35 (0.84)
	慎重さ	3.10 (0.57)	3.12 (0.66)
	対人的防衛	3.02 (0.82)	2.71 (0.96)

Table 10に示す対人場面でも、承認欲求要因の主効果がみられた ($F = 22.04$, $df = 4/156$, $p < .001$)。多重比較（ライアンの法）の結果、社会的スキルはその他の4つの因子より有意に高く、冷めた人間関係はその他の4つの因子より有意に低いという結果であった。

考 察

1. 痩身願望のゆらぎ

Table 1, Table 2 の結果から、本研究で設定した痩身願望の強弱の状況間で痩身願望の強さは異なることが明らかになった。すなわち、一人の人間のなかで、状況によって痩身願望の強さは異なるのである。この現象を本研究は痩身願望のゆらぎと捉える。

2. 自己愛が痩身願望のゆらぎに及ぼす影響

自己愛（NPI）がゆらぎに与える影響の分析（重回帰分析）からは、単独場面では有意な影響がみられたが、対人場面では有意な影響はみられなかった。そして、Table 3 にあるように、単独場面では、優越感、有能感、注目賞賛欲求ではなく、自己主張性の低さが痩身願望のゆらぎに影響を及ぼすことが示された。

自己愛が痩身願望のゆらぎへ及ぼす影響が単独場面でみられ、対人場面でみられなかつた結果は以下のように解釈できよう。先述のように、単独場面は、自己イメージ（「これなら着れそうだ」）と実際の自己のあり方（サイズが小さかったようで着ることができなかつた）との比較であった。自己イメージは自己の理想、願望、つまり自我理想が反映されて形成される。そして、自己の理想や願望の根底には自分を愛する気持ちがある。そのため、実際の自己のあり方が自己イメージとあまりにも食い違つた場合には、自己愛の傷つきが生じてしまう。このときの自己愛の傷つきが痩身願望のゆらぎを喚起した、と言えるであろう。

一方、他者観察の場合は、自分と同じくらいの体型をした友人がダイエットをしており、少食であることを観察した、ということである。これは自分の現状を意識させる、自分をふりかえる契機の段階にとどまり、まだ自己愛を喚起する段階には至らないのではなかろうか。

次に、自己主張性の低さが痩身願望のゆらぎに影響を及ぼすという結果について考えてみよう。この結果は、自己主張性が低いほどゆらぎが大きくなることを意味する。自己主張性の低さとは、つまり自己主張ができないことである。何が欠けているために自己主張ができないのか。そして自己主張が可能になるためには何が必要なのか。自己主張を支えているものは、自らへの自己肯定感、自己信頼感であると言える。自己肯定感、自己信頼感があつてはじめて、周囲の評価にいたずらに振り回されることのない、自分なりの評価基準、価値基準、が自らのなかに確立される。自分なりの評価基準、価値基準が確立されればそれによって自らの考え、行動を評価できるようになる。つまり自己評価の力が生まれる。

自己主張性が低いということは、上記のような自己肯定感、自己信頼感が薄く、自分なりの評価基準、価値基準、行動の軸が自らのなかに確立されていない状態である。こうした人は、評価基準や価値基準を外部に求めざるを得ない。したがって自分で自分を評価することもできず、評価の基準も常に外部に存在する。こうした人にとって、社会的認知を得ている評価基準である痩身礼賛は、自らを評価するひとつのものさしになりうる。

すなわち、自己肯定感が欠落し、自己主張ができない状態とは、自分なりの評価、価値の基準がない状態である。したがって外部の評価基準である痩身礼賛を自分のなかに取り入れる。しかし、痩身礼賛という評価基準は、本当の意味で自分のものにはなっていないので、どうしてもゆらぐことが多くなってしまう。自己主張性の低さとゆらぎの大きさとの間に有意な関係が見いだされた背景にはこうしたメカニズムが存在していると言える。

3. 承認欲求が痩身願望のゆらぎに及ぼす影響

承認欲求では、単独場面で、社会的スキル、冷めた人間関係と痩身願望のゆらぎ幅との間に有意な関係がみられた（Table 4）。

承認欲求とは、先述のように、他者から肯定的評価や社会的強化（承認、賞賛）を得、否定的評価や社会的罰（批判や拒絶）を避けようとする欲求である。問題の部分に書いたように承認欲求は、自己なりの評価基準、価値基準のなさと関係している。

承認欲求尺度（MLAM）のなかで、社会的スキルの因子は、Figure 5の尺度項目にもあるように、人との摩擦や軋轢を避け、いかにうまくつきかっていくか、という面を示す。また、冷めた人間関係の因子とは、Figure 5の尺度項目にもあるように、たとえ表面的ではあれ、円滑な人間関係を進めるための割り切った考え方を示している。

この両方の因子に共通しているのは、自分の欲求や感情の表現を抑え、主張のぶつかり合い、お互いの傷つきを避け、自らを偽ってでも摩擦や軋轢を避ける、という人間関係のあり方であろう。

承認欲求が強いということは自分なりの評価基準、価値基準がないということである。自分の心のなかに空虚感を抱え、周囲からの評価がまるごと自分の評価になってしまう。したがって、周囲からの肯定的評価、承認を際限なく追いかけてしまうことになる。

こうした傾向の人にとって、周囲の人とのぶつかり合いや軋轢に基づく自己の傷つきは、致命的なものに思えるのではなかろうか。自分への批判や否定的評価に耐えることができないのであろう。こうした不安感を抱えるがゆえに、軋轢やぶつかり合いを過度に避けた人間関係になってしまうのではなかろうか。したがって、軋轢やぶつかり合いを過度に避けた人間関係傾向が社会的スキル、冷めた人間関係の双方の得点の高さとなって現れると言える。

社会的スキル、冷めた人間関係傾向には以上のような背景が存在すると考えるならば、社会的スキル、冷めた人間関係と痩身願望のゆらぎとの間には、どのようなメカニズムが存在するのだろうか。ここにも先述の自己主張性と共通するメカニズムが存在していると言えるのではなかろうか。すなわち、つまり、自分なりの評価基準、価値基準がない、そのため周囲からの肯定的評価を求める、肯定的評価を求めるため軋轢やぶつかり合いを避けようとして社会的スキルを重視する。同時に自分なりの評価基準がないため外部からの評価基準として一般的に認知された痩身礼賛を取り入れる。つまり、社会的スキルと痩身願望は、周囲からの肯定的評価を得るために取り入れた手段なのである。しかし、痩身礼賛はあくまで外部基準の取り入れであるため、自分のなかに確固たる基準として根づいているわけではない。このことが状況によって痩身願望のゆらぎを生む、という結果になった。これが社会的スキル得点が高いほどゆらぎ幅も大きくなったメカニズムであろう。

4. 自己愛・承認欲求が痩身願望のゆらぎに及ぼす影響のまとめ

自己愛（Table 3）、承認欲求（Table 4）、が痩身願望のゆらぎに及ぼす影響の結果の根底には同一メカニズムの存在が推察できる。自己愛のなかの自己主張性の低さと痩身願望とのつながりの

根底には、自己肯定感、自己評価能力の低さに基づく自分なりの評価基準、価値基準の欠落が指摘できた。一方、承認欲求のなかの社会的スキル、冷めた人間関係と瘦身願望とのつながりの根底にも、自分なりの価値基準がないゆえに他者からの批判、否定的評価を避ける、という点が指摘できた。これらのことからが、瘦身贊美という外部価値の取り入れ、取り入れたもののそれが自分のかなに確固たるものとして根づかないためのゆらぎ、という現象につながったと思われる。

5. 瘦身願望のゆらぎ幅が小さい群の特徴

ここでは、分析の目的に基づき、瘦身願望のゆらぎ幅が小さく、瘦身願望が高い人達（H群）の結果について考察する。

1) 自己愛（NPI）、承認欲求（MLAM）、社会的望ましさ（MCSD）と瘦身願望との関連

ここでは、Table 5, Table 6 にみられる結果分析を行う。Table 5 の単独場面では、瘦身願望 H 群 L 群ともに同様な傾向であり、社会的望ましさ（MCSD）得点が最も高いという結果であった。Table 6 の対人場面では、瘦身願望 H 群 L 群ともに同様な傾向を示し、承認欲求（MLAM）、社会的望ましさ（MCSD）得点が自己愛（NPI）得点より高いという傾向であった。

結果の傾向は、単独場面でも対人場面でも、また H 群でも L 群でも、ゆらぎ幅が小さい群は自己愛得点よりも承認欲求、社会的望ましさ得点が高いという類似した傾向がみられた。そこで、以後は 2 つの場面（単独場面と対人場面）をまとめて、瘦身願望 H 群について考察してみよう。

尺度の内容から判断すると、ゆらぎ幅が小さく瘦身願望が高い人は、誇大的優越感、誇大的自己肯定感といった自己愛に特有な傾向は少なく、むしろ、自己肯定感が低いゆえに、自分の本心を偽ってでも社会的に認知されている価値を受け入れ、そのことによって評価されたい、という承認欲求、社会的望ましさ傾向が強いことがわかる。

このことから、ゆらぎ幅が小さい H 群とは、自分のなかに確固とした、社会的に認知されているものさし（評価基準）を渴望している人達、ということができる。目に見えるかたちでの、安心できるかたちでの確かなよりどころを渴望している人達、ということができる。そしてこのことは自分なりの評価基準、価値基準の欠落を意味している。

2) 自己愛尺度（NPI）の各因子と瘦身願望との関連

Table 7, Table 8 に示す結果にみられるように、ゆらぎ幅が小さい群での自己愛尺度の得点の高さは、単独場面、対人場面いずれも同様な結果となった。そこで瘦身願望 H 群を対象に、この両場面をまとめて考察したい。

結果から、ゆらぎが小さい H 群では、自己愛尺度のなかでも、注目賞賛欲求、自己主張性得点が、有能感、優越感得点より高いことが明らかになった。

Table 7, Table 8 の結果で特に注目すべき点は、注目賞賛欲求と自己主張性とがほぼ同レベルの高さを示したことである。自己主張傾向の背景には自己肯定感、自己信頼感があることを考えると、なぜ自己肯定感をもっているにもかかわらず注目賞賛欲求が高くなるのか、という点が問題に

なる。

ここで自己愛について考えるならば、自己愛の満足とは、自我理想と現実自己との一致によってはじめてたらされるものである（小此木, 1992）。したがって、注目賞賛欲求と自己主張性とがほぼ同レベルにあるという現象の背景には、内面には自己信頼感、自己主張性を抱えているにもかかわらず、現実生活では自我理想が満たされていない、というケースが考えられる。従来、自己愛傾向の特性として、理想の実現を限りなく追い求める傾向が指摘されている（小此木, 1992）。この見解を踏まえると、自己信頼感があるゆえの自我理想の高さ、という心理機制は十分考えられる。自己主張性、自己信頼感があり、自我理想も高いがゆえにそれだけ現実生活のなかでそれが満たされない場合の不全感が強い。この不全感が注目賞賛欲求の高さとなって現れたのではないだろうか。

3) 承認欲求の各因子と瘦身願望との関連

Table 9（単独場面）、Table10（対人場面）もほぼ同様な結果であり、ゆらぎが小さいH群では、社会的スキル得点が高いということが明らかになった。ゆらぎ幅の規定要因を検討したTable 4では、社会的スキル得点、冷めた人間関係得点が高いほど瘦身願望のゆらぎ幅が大きい、という結果が得られていた。つまり、Table 4, Table 9, Table10、から、社会的スキル因子が高いことはゆらぎ幅を大きくし、同時にゆらぎ幅が小さく瘦身願望が高い人でも社会的スキル得点が高い、ということがわかる。これらの結果は、社会的スキル得点が高い人のなかには、ゆらぎ幅が大きい群と小さい群とが存在する、ことを意味する。

一見矛盾する結果のようであるが、これらの結果は、社会的スキル得点が高い背景には2つのパターンが存在することを示唆しているのではなかろうか。

1つは、自分なりの評価基準や価値基準が確立されていない、自分への批判的評価に耐えられない、そのため軋轢やぶつかり合い避けた人間関係になる、結果として社会的スキル得点が高くなる、というパターンである。したがって、ここでは社会的スキルは自分のなかにある評価基準、価値基準に合致したものではない。あくまで手段である。社会的スキル得点が高くゆらぎ幅が大きい群はこのパターンに入る。

もう一つのパターンは、自分のなかに評価基準や価値基準が確立されており、社会的スキルがそれらの評価基準、価値基準と合致するパターンである。社会的スキル得点が高くゆらぎ幅が小さい群はこのパターンに入る。つまり、ゆらぎ幅が小さく瘦身願望が高い場合は、瘦身という価値基準が本当の意味で自分のものとなっている。同時に、社会的スキルとは自分への周囲の目を重視する、ということである。つまり、自分が周囲からどうみられているか、を重視するのである。瘦身という価値基準が自分のものとなっているということは、自分の価値基準と瘦身という価値基準が合致した、ということである。このことは、元来自分がもっている価値基準のなかに、自分への周囲の目を重視する、という内容が含まれていることを意味する。このように考えると、社会的スキルと瘦身願望とには、自分への周囲の目、という共通の内容が含まれていることがわかる。ゆらぎ幅が小さく瘦身願望が高い人で社会的スキル得点も高い、という結果の背景には、こうしたメカニズム

が存在しているのではなかろうか。

6. 今後の検討課題

1) ゆらぎ幅の大きさ

本研究では、痩身願望のゆらぎ幅という全く新しい視点を提出した。この視点をとることによって、従来明らかにされなかった痩身願望のあり方が浮き彫りにされることが予想される。

具体的には、ゆらぎ幅という視点をとることで痩身願望をいくつかのタイプに分類できるようになる。そのうえで、個々のタイプによる痩身願望の特徴の違いを明らかにできる。

本研究では、ゆらぎを規定する要因を探索的にとりあげ、これらの要因がゆらぎ幅に与えている影響の諸相、およびゆらぎ幅が小さく痩身願望が高い水準に保たれている群について分析した。

そのうえで、今後さらに深く検討せねばならない課題は、ゆらぎ幅自体の意味である。とりわけゆらぎ幅が大きいことの意味である。

ゆらぎ幅が大きいことについては2つの解釈が可能である。1つ目の解釈は本研究でも述べたように、痩身願望が強固でない、ということである。体型に注目しなければならない状況になると痩身願望が強くなるが、普段はそれほど意識されない、というパターンである。痩身願望は強固ではなく切実な問題にもなっていない、というパターンである。

注意する必要があるのはもう一つのパターンである。通常、重大で切実な問題ほど迷いや揺れ動きは大きくなるものである。これと同じ状況である。すなわち、ゆらぎ幅が大きいことが痩身へのとらわれを意味しているパターンである。痩身願望の強さが極端に変わる場合、この極端さもまた、痩せるということが当人にとって重大な関心事になっていることを示している。

痩身願望が極端に変わった場合の意味を考えてみよう。痩せることに対し両極端な態度をとるということは、痩せることに対して適度で安定した距離を保ち得ないことを意味する。痩せたいという気持ちに呑み込まれているか、痩せたいという気持ちを完全に拒絶するかのどちらかである。呑み込まれると痩せることの悪い面にまで足を踏み入れてしまうことになろう。また、完全に拒絶することは痩せることのよい面から目をそらしてしまうことになる。つまり、極端な変動とは、痩せることのよい面と悪い面の両方を見定め、過度にならずに痩せることのよい面だけを受け入れられる水準に自らをとどめておくことができない状態である。これは痩せるという行為、痩せたいという気持ちを自らのなかで適切に処理しているとは言えない状態である。

したがって、今後ゆらぎ幅を考える場合、取り上げる必要があるのは、ゆらぎ幅が小さく痩身願望が高い水準で保持されている群と同時にゆらぎ幅が大きい群であり、この両群の比較検討である。

2) 痩身願望と自我理想との関係

自己愛と承認欲求の重回帰分析では、有意な関係が見いだされたのは単独場面のみであった。単独場面は自己イメージと実際の自己との比較、対人場面は他者と実際の自己との比較、であった。自己愛、承認欲求と痩身願望との有意な関係が単独場面のみでみられたということは、単独場面の

ありようのなかに瘦身願望の特徴をさらに深く知る手がかりが含まれていることを示唆している。

その手がかりとは、本研究のなかでもふれたが、自我理想である。単独場面での自己イメージには自我理想が反映されている。また、Table 7, Table 8 の考察では、現実生活のなかでの自我理想実現の挫折と瘦身願望との関連に言及した。現時点では次のようなパターンが考えられる。1つめは、瘦身が自らの自我理想である場合、それが挫折する、というパターンである。2つめは、現実生活のなかで何らかの自我理想の挫折を体験し、自我理想の方向転換として瘦身が選択される場合である。

いずれにしても瘦身願望は願望である以上、そこには理想との関連がある。今後、この点も検討の俎上にのせていくべきであろう。

謝 辞

本研究をすすめるにあたり、データの収集と分析に協力をいただいた平成13年度3年生ゼミ生の、下久保美香さん、田原まどかさん、森下美幸さん、山下あやさん、に心から感謝いたします。

引用文献

- 浅野千恵 1996 女はなぜやせようとするのか 勁草書房
馬場安希・菅原健介 2000 女子青年における瘦身願望についての研究 教育心理学研究 48, 267-274.
仮屋園昭彦 1997 青年期の瘦身願望を規定する要因に関する研究 鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編 49, 259-269.
北村俊則・鈴木忠治 1986 日本語版 Social Desirability Scale について 社会精神医学 9, 173-190.
小塩真司 1998 青年の自己愛傾向と自尊感情、友人関係のあり方との関連 教育心理学研究 46, 280-290.
小塩真司 1997 自己愛傾向に関する基礎的研究 名古屋大学教育学部紀要 44, 155-163.
向井隆代 1998 摂食障害 日本児童研究所(編) 児童心理学の進歩 Vol.37 金子書房 225-246.
下坂幸三 1999 拒食と過食の心理 岩波書店
小此木啓吾 1992 自己愛人間 ちくま学芸文庫 筑摩書房
植田 智・吉森 譲 1990 日本版MLAM承認欲求尺度作成の試み 広島大学教育学部紀要 第1部 第39号 151-156.